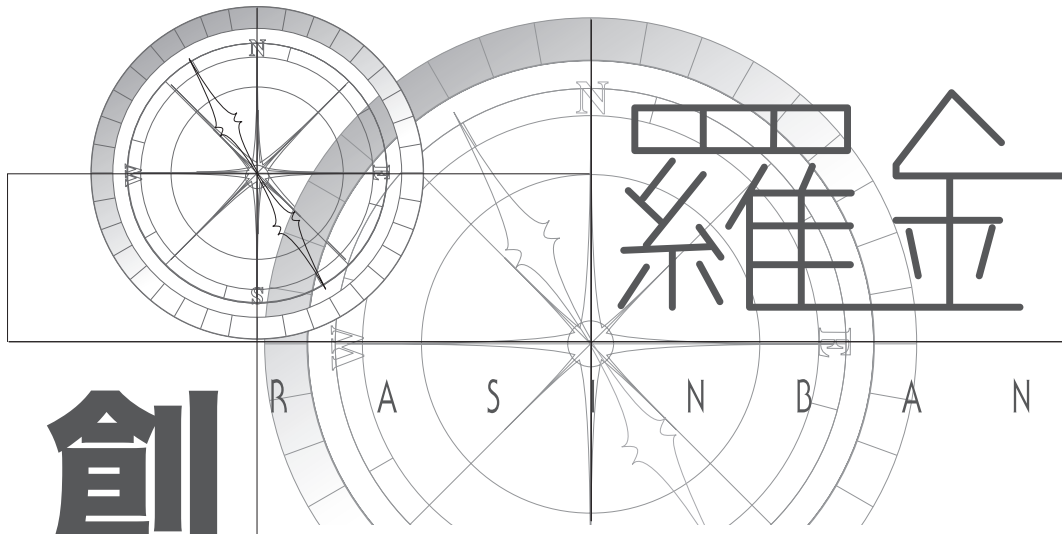


金住系 盤舟

COMPASS

http://www.hodojin.net

発行所: 東京都豊島区南池袋
一丁目十三番十六号
日蓮正宗法道院法華講
03 (3984) 2650



創価学会の誓ひとへ (2)

創価学会は、何を目的として 設立されたのか

創価学会は、日蓮正宗の信徒団体として設立されました。

創価学会の使命と目的について、歴代会長の言葉を挙げてみましょう。

初代会長牧口常三郎氏は、

「大善生活がいかにして吾々(われわれ)の如きものに百発百中の法則として実証されるに到ったか。それには、仏教の極意たる妙法の日蓮正宗大石寺にのみ正しく伝わる唯一の秘法があることを知らねばならぬ」(大善生活実証録 第四回総会報告一三ページ)

「どこまでも御開山上人の正しく御伝へ下された、日蓮正宗大石寺の御法義に従ひ奉って『自行化他』の大善生活をなし、国家教育の革新に貢献したい」(大善生活実証録 第五回総会報告五ページ)と述べています。

第二代会長戸田城聖氏は、

「日蓮大聖人様から六百余年、法灯連綿と正しくつづいた宗教が日蓮正宗である(中略)この仏法こそ、私たちが真に幸福に導いてくれる宗教であること、私たちが日夜身をもって体験しているのである」(戸田城聖全集二一―二二ページ)

「私たちは無知な人びとをみちびく車屋である。迷っている人があれば、車に乗せて大御本尊様の御もとへ案内していくのが、学会の唯一の使命である。」

宝の山にはいつて宝をとるかとはならないかは、その人の信心の結果であつて、ただ宝の山たる大御本尊様へ案内するのが、われわれ学会の尊い使命なのである(同一二三ページ)

「なんといっても、御本山に登り、親しく大御本尊様を拝まなくては、本物の信心にはなれない(中略)今後、できるだけ多くの会員を登山させるよう、計画を立てたいと思つている」(同四九〇ページ)といつています。

また、第三代会長の池田大作もかつて、初代・二代会長の言葉を受けて、「わが創価学会は、日蓮正宗の信者の団体であります。したがって、私どもは、大御本尊様にお仕え申し上げ、御法主上人猊下にご奉公申し上げることが、学会の根本精神であると信じます」(昭和三五年五月三日会長就任挨拶 大白蓮華 昭和三五年六月号七ページ)

と述べていました。これら歴代会長の言葉からも、創価学会が日蓮大聖人の仏法を正しく信仰する日蓮正宗の信徒団体として出発し、御法主上人の御指南に随順して信行に励んできたことは明らかです。

宗門と創価学会の問題が起きた当初はどちらにつくべきか悩んだが、今は学会と運命を共にすると思ひ切つた

あなたが、学会と運命を共にすると決めたのは、仏法の道理や正邪によるのではなく、偏った情報や

思い込みによるものではありませんか。

あなたが執着している創価学会では、「日蓮大聖人の御精神を實踐する」「大聖人の教えを广泛宣传する」という言葉をさかんにいいますが、信仰の根本となる末法の御本仏日蓮大聖人の仏法の実体はあります。

すなわち、日蓮大聖人の仏法の根幹である本門戒壇の大御本尊と唯授一人の血脈が創価学会にはないのです。しかも創価学会は、自らの非を覆い隠すために、日蓮大聖人の仏法を正しく受け継いでいる日蓮正宗を、あらゆる悪口雑言(あつこうぞうごん)をもって罵(ののし)つています。このような集団が、人びとを成仏に導く清浄で正しい宗教であるはずがありません。

あなたは、仏法の正邪を深く考えることなく、「学会と運命を共にする」「思い切つた」と決めつけていますが、あなたが安穩な成仏の境涯を味わうのか、それとも業火に焼き焦がされる地獄の苦しみを味わうのか、この大きな違いをよくかみしめ、今一度、冷静に考えてみるべきです。

ちなみに、『聖人御難事』には、「ただ一えんにおもひ切れ」(御書一三九八ページ)

という御文がありますが、これは「見境なく思い切つてしまえばよい」という意味ではありません。それは、この御文の前段に、「我等現(げん)には此(こ)の大難に値(あ)ふとも後生は仏になりなん」(御書一三九七ページ)

とあるように、いかなる法難に遭つても、即身成

仏の正法を迷うことなく信仰し貫くことを教えられたものなのです。

「創価学会では成仏できないうちで死んだ先のことなど考えていない」

「死んだ先のことなど考えていない」などというあなたは、日蓮大聖人の仏法をまったく理解していません。

日蓮大聖人は、「恐れても恐るべきは後世、慎みても慎むべきは来世なり」（聖愚問答抄御書四〇〇ページ）

と、死後の成仏を心がけることこそ大切であると教えられています。また、あなたは「成仏」という言葉を誤解しています。成仏とは、臨終や死後のみをさすのではなく、現世のみならず来世においても崩れることのない絶対的な幸福境涯を築くことです。

このことを日蓮大聖人は、「いきておはしき時は生（しょう）の仏、今は死の仏、生死ともに仏なり。即身成仏と申す大事の法門これなり」（上野殿後家尼御返事御書三三六ページ）と御教示されています。

「死んだ先のことなど考えていない」といっても、あなたは、三世にわたる生命論や未来の成仏を否定しているわけではないでしょう。にもかかわらず、あなたがそのようにいうのは、日蓮大聖人が説かれる即身成仏の法門に照らして、宗門から「創価学会は間違っている」と指摘されることから逃れたいためでしょう。あなたが大事に考えている現世の幸せはもちろんです。未来永劫の幸せは、正しい仏法である日蓮正宗の教えを信仰しなければ得られないのです。

若い頃から「広宣流布」のために戦ってきた。創価学会を辞めることは、いままでの人生を否定することになる

創価学会は、昭和十二年の発足以来、平成三年までの約五十年間、日蓮正宗の信徒団体として日蓮大聖人の仏法を宣揚し、広宣流布をめざす折伏布教に大きな成果を挙げました。これは、多くの学会員が広宣流布の実現をめざして、昼夜の別なく折伏に尽力してきたことによるものであり、この仏道精進によって、個々の学会員は大きな功德を受けることができたのです。しかし、平成二年の池田スピーチに端を発した創価学会の宗門への背信行為と、それを改めない池田の執念にもとづく指導に盲従したことによって、創価学会に所属する者はすべて日蓮正宗の信徒ではなくなりました。このことは、宗門にとっても、広宣流布のために努力してきた学会員にとっても、じつに不幸な結果となりました。

「若い頃から広宣流布のために闘ってきた」というあなたは、長い間すべてをなげうって信心に励んできたものと思います。しかし、あなたがめざした「広宣流布」とは、日蓮大聖人の正法をもって不幸な人びとを救っていくことであって、創価学会の組織の拡大とか、自分の名誉のためのものではなかったはずなのです。

第二十六世日寛上人は、『撰時抄愚記（せんじしやうくぎ）』に、
「今末法に於（お）いては、必ず応（まさ）に文底深秘（もんていじんび）の大法広宣流布すべし（中略）文底深秘の大法、其（そ）の体如何（い）かん。答（こた）ふ、即（す）なわ（ち）是（こ）

れ天台未弘（みぐ）の大法・三大秘法の随一・本門戒壇の御本尊の御事（おんこと）なり」（文段二八九ページ）

「此の本尊は広布の根源なり」（同二九〇ページ）

と仰せられ、広宣流布とは本門戒壇の大御本尊を弘宣（くせん）することであり、この大御本尊こそ、広宣流布の根源であることを明白にご教示されています。

いうまでもなく、本門戒壇の大御本尊は御歴代上人によって、日蓮正宗総本山大石寺に厳然と護持伝承（ごじでんしょう）されているのです。すなわち、日蓮正宗を離れて真の広宣流布はあり得ないのでから、広宣流布のために生きてきたあなたにとって、日蓮正宗から離れることは、自分の人生を否定することになるのです。

創価学会に籍を置いているが、今でも大石寺の大御本尊を念じて勤行している。それではいけないのか

第二祖日興上人の御在世当時、佐渡の信徒の中に、「自分は大聖人の直々の弟子だ」と名乗る人や、血脈の大事を知らずして、日興上人以外の人を師匠とする人がいました。

日興上人はこれらの信徒に対して、「この法門は、師弟子をただして仏になり候。師弟子だにも違い候へば、同じ法華を持（たも）ちまいらせて候へども、無間地獄に墮ち候なり」（歴全一―八三ページ）と御教示されています。

この御文は、同じ南無妙法蓮華経を唱えたとしても、唯授一人の血脈を所持される日興上人を師匠として、その御教導に従わなければ、無

間地獄に墮ちることは疑いないと厳しく戒められたものです。

あなたは、以前には日蓮正宗の信徒として信仰に励んでいたのですが、現在の創価学会は日蓮大聖人以来の血脈を否定し、数々の謗法を犯して日蓮正宗の教義信仰に背く邪宗教になり果てました。まさしく師弟子の道に狂った教団になったのです。

したがって、あなたがいかに総本山の大御本尊を心に念じて勤行をしても、それは正しい師弟相對の信心ではなく、信心の血脈が流れていないのですから、功德がないばかりか、かえって墮地獄の嚴罰を被ることになるのです。

『折伏教本』より抜粋

